

俵薬師・隠岐郡知夫村仁夫

令和4年2月13日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 中本マキさん（明治39年生まれ）
収録・昭和51年8月1日

あらすじ

昔、庄八という嘘ばかりつく貧乏人がおった。隣は親方で、その庄八が隣村から牛を安い値段で買ってきて、お金を飲ませ隣の親方に、「毎日、お金をひるので間もなくおまえに追いつく」と話しておった。

隣の親方が、「千円で売ってごしえ」と頼むので売ったげな。

初めは牛は五銭出し、十銭出ししていたけど、腹に残っている金を出したら、金を出さんことになるから、庄八は親方が怒って来ると分かっているの、お母さんに、「たたかれりや死んだふりをする、太鼓をたたいてくれ。われが生きたふりをする」と約束しておいた。

親方が怒って「だまされたんだ。庄八をたたき殺してしまえ」と若い者を連れてきて、庄八をたたいたら、庄八は死んだふりをした。庄八のお母さんが、「たただけは生き返る太鼓があるの、たたいてみる」とたたいたら、生き返ってきたので、

「太鼓を売ってごしえ」と頼むけど、「生き返る太鼓だけに売られの」と庄八が言うけれど、親方の娘がいつもテンカで死にそうになるので太鼓がほしい。それも千円に売った。女の子がテンカンで倒れたけど、なんぼ太鼓をたたいても生き返ってこない。

親方が怒って、「こんな庄八に沈め石をして海に持って行って投げ込め」と若い者に言った。

若い者みなどで担ぎ、峠を上がって行ったものの、ひと休みしよつたら、また庄八が嘘をつくそう。

「おまえらちに千円わてあげる。庭の隅にあるけに取れ」と言ったら、男たちは帰って金を捜しはじめた。

その後、片目の魚屋のおじいさんが魚を担いで峠に来た。また庄八が、「片目でおるが、われは両目がなかったけど、一週間縛られて通夜しちよつたら目が治った。おまえもここにお通夜をしえぬか」とおじいさんに縄をほどいてもらって、反対におじいさんを縛って、そこへ投げたおいたそう。

庄八はおじいさんの魚を担いで、逃げてしまっていない。

男たちは、そこに投げられちよるじいさんを担いで、「われは庄八じゃない」と言うけれど、「今度ばつかしやだまされのけん」と魚屋を海の中へ投げ込んでしまった。

庄八は魚を担いで、親方の所へ行った。「海で竜宮城へ行きたら、乙姫さまやら何やらで遊んでおった。飽きがきたけに魚売りに来た。買ってください」と言う。

すると親方が、「われも行きたい」と言う。庄八も、「おまえも行くがええ」と言って、親方を沈め石をつけてして殺してしまった。

わたしらは今でも嘘つく者を「こな庄八」と言って笑っております。

その昔のこんべのは。

解説

昔話は大きな悪を容認する残酷さを持つている。この昔話の主人公は、ウンで固めた人生を楽しんでおり、親方まで殺してしまう。話では特に非難をしているわけでもない。人間の非常さの一面をこれは示しているのであろうか。

（元島根大学法文学部教授）

